

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：31304

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03312

研究課題名（和文）分断社会を乗り越える共感メカニズムの解明：ワーキングメモリキャパシティの観点から

研究課題名（英文）Examining Empathy Mechanisms for Overcoming Social Division: A Perspective on Working Memory Capacity

研究代表者

吉田 綾乃 (Yoshida, Ayano)

東北福祉大学・総合福祉学部・教授

研究者番号：10367576

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究より、援助を必要とする人物が引き起こす否定的感情を制御する力が向社会的行動の生起において重要であること、認知能力が高い者ほど集団間共感バイアス（外集団より内集団に共感し援助を行う）を引き起こすこと、外集団成員回避目標が活性化した場合は、認知能力が高い者ほど外集団への援助政策を支持しないことが示された。さらに、外集団脅威状況において、認知能力が高く認知的共感を行う者ほど外集団への否定的感情が生じにくいことが示された。社会の分断を克服するためには、認知能力の個人差と文脈要因を踏まえて、共感の促進的・抑制的效果を明らかにする必要があることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

共感研究において社会的文脈から切り離された刺激が使用されているという批判や、共感とワーキングメモリの関連性を検討した研究が不足しているという指摘があった。本研究はこれらの課題を克服するものである。認知能力の高さが、その個人が置かれている状況が活性化する行動目標によって、共感や向社会的行動を促進する方向にも抑制する方向にも機能することを明らかにした点で、分断の生起メカニズムと克服方法に関する理解を深めることに貢献した。

研究成果の概要（英文）：This study examined the factors influencing empathy mechanisms in overcoming social divisions. First, the ability to regulate negative emotions elicited by individuals in need is crucial for the manifestation of prosocial behavior. Second, individuals with higher cognitive abilities are more prone to intergroup empathy bias. Third, when out-group avoidance goals are activated, individuals with higher cognitive abilities are less likely to support aid policies for out-groups. Additionally, in threatening out-group situations, those with higher cognitive abilities and cognitive empathy are less likely to experience negative emotions towards out-group members. To overcome societal divisions, it is essential to understand the facilitative and inhibitory effects of empathy, considering individual differences in cognitive abilities and contextual factors.

研究分野：社会心理学

キーワード：分断 共感 ワーキングメモリ 社会的認知

1. 研究開始当初の背景

今日、社会の分断に対抗する心理メカニズムとして「共感」が注目されている。しかしながら、近年の社会心理学研究から、共感を増大させるメカニズムそのものに外集団の排斥を強化する側面があるなど（佐藤, 2016）、共感が反社会性を有することが明らかにされている。異質な他者に対する共感や利他性を引き起こすことは容易ではない。しかし、共感社会集団の垣根を越えて人々が協働するためには、不可欠な心理メカニズムである。そこで、本研究ではワーキングメモリキャパシティ（Working Memory Capacity: 以下、WMC とする）の観点から、異なる背景を持つ他者への共感を引き起こす心理プロセスを解明することを通して、分断社会を乗り越えるための方略を見出すことを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、WMC という実行系注意をコントロールする能力の差（Engle, 2002）の観点から共感プロセスについて検討することである。共感を含む、社会の分断を引き起こす心理的要因について先行研究のレビューを行うとともに、以下の4点について実証研究を行った。

【研究1】困窮者との接触による否定的感情の制御と「思いやりの減衰」

困窮している人の人数が増加するにつれて、感情的反応や支援行動が減少する現象は「思いやりの減衰（Compassion fade）」と呼ばれる（Västfjäll ら, 2014）。WM の機能のうち、「目標志向行動に伴う競合反応の抑制」の観点からエフォートフル・コントロール（Effortful Control; 以下、EC とする）に着目し、「罰からの注意の切り替え（悲しみなどの否定的情動から注意を切り替える力）」の個人差を測定した。罰からの注意の切り替え高群は低群よりも、複数の犠牲者の存在によって生じた否定的感情のダウンレギュレーションを効率的に行うことができるために、思いやりの減衰が生じにくいと予測した。

【研究2】WMC と共感マインドセットが集団間共感バイアスに及ぼす影響

集団間共感バイアス（intergroup empathy bias）とは、外集団よりも内集団成員に対して共感や援助行動を示す現象を指す（Fourie et al., 2017）。Hasson ら（2022）が検証した、共感力は無限（あるいは有限）であるというマインドセット効果を踏まえ、「共感力は無限であるというマインドセットを有する WMC 高群は、低群よりも集団間共感バイアスが生じにくいだろう」という仮説を検証した。

【研究3】感染脆弱性と感染脅威目標、WMC が集団間共感バイアスに及ぼす影響

行動免疫システム理論は、感染脅威が高まると、外集団を回避する傾向が強まると予測する（Schaller, 2011）。WMC 高群は低群と比較して、目標遂行行動を効果的に遂行することができるため、「感染脅威が高まり外集団成員回避目標が活性化した場合は、WMC 高群は低群よりも集団間共感バイアスが生じるだろう」という仮説を検証した。

【研究 4】外集団脅威情報への接触と認知的 / 感情的共感が外集団への感情に及ぼす影響

外集団に対する怒りなどの集団間感情は、彼らに対する攻撃の先行要因となっている（縄田, 2015）。注意制御が高く認知的共感が高い者は、外集団脅威情報接触後に外集団への否定的な集団間感情が喚起しにくいと予測した。また、注意制御が低く感情的共感が高い者は、外集団脅威情報接触後に外集団に対して否定的な集団間感情を喚起すると予測した。

3. 研究の方法

【研究 1】web 調査に参加した大学生 214 名が分析対象者となった。Västfjäll ら（2014）に基づき、援助を必要とする人数が 1 名条件と 2 名条件のシナリオを提示した。寄付金額（1 項目、11 件法、0 円-1000 円）、「同情」、「否定的感情」、「援助の必要性認識」、「心理的距離」、「援助に対する責任」測定項目、成人用 EC 日本語版尺度（山形ら, 2005）に回答を求めた。

【研究 2】連続する研究に参加した 112 名が分析対象者となった。オペレーションスパンテスト（OSPAN）により WMC を測定した。共感マインドセットは Hasson ら（2022）を参照し、「人は自由に使える無限の共感力を持っている」などの項目を用いて測定した。内集団（大学生）と外集団（外国人労働者）が Covid-19 により経済的困窮状況下に置かれているニュースを題材とした文章を提示した。彼らに対してどの程度「助けたい」気持ちや「同情」「共感」を感じるか、彼らの困窮状況を改善する政策の推進を支持するか等を問うた。

【研究 3】112 名（研究 2 と同様）が分析対象者となった。OSPAN により WMC を測定した。感染脆弱意識（PVD）尺度日本語版に回答を求めた。感染脅威目標の顕現化を行うため、新型コロナウイルスの感染経験（感染の有無、感染回数、感染時の症状）を問うた。実験操作と主要な従属変数は研究 2 と同様であった。

【研究 4】オンライン調査に参加した 1102 名（男性 556 名・女性 546 名、日本国籍 98%）が分析対象者となった。成人用 EC 尺度日本語版、認知的共感として「視点取得」、感情的共感として「情動伝染」を測定した。Shepherd ら（2018）の先行研究に基づき将来の在留外国人の予測人数情報とグラフを示し、高脅威条件と低脅威条件を操作した。その後、集団間感情（不安・怒り・恐怖）等に回答を求めた。

4. 研究成果

社会の分断（極性化）を引き起こす心理的・社会的要因について研究のレビューを行い、概念を整理した（Table 1）。分断を解消するためには、認知能力（i.e. WMC）を高めるだけではなく、高い認知能力が外集団排斥を引き起こす可能性があるため、個人が置かれた状況下でどのような行動目標が活性化されるのかを考慮する必要性があることを指摘した（吉田, 2022）。

Table 1

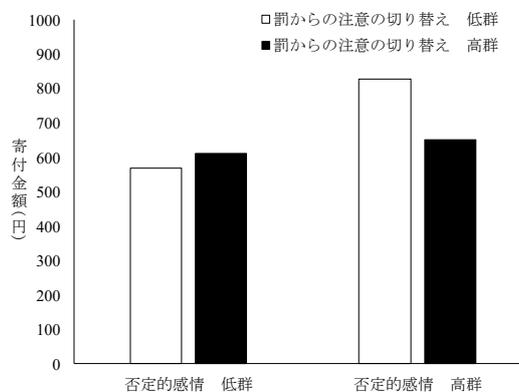
政治的イデオロギー（保守主義/リベラル）に関する研究から示された各領域における特徴

研究領域	高 保守主義	高 リベラル
パーソナリティ	安定；変化への抵抗	新規性
	同調行動	型破りな自己表現
	伝統	新しい経験と感覚
	順序・構造・閉鎖への欲求	柔軟性と変動性
	複雑さを好まない、厳密なカテゴリー化	不確実性と曖昧さに対する寛容さ
	神聖さ	害の最小化
	権威	平等
	誠実さ	共感
	外集団との区別	ユニバーサルコミュニティ
認知	権威の表現	温かさの表現
	ネガティビティバイアス	明確なバイアスを示さない
	脅威や損失に対する高い感受性	習慣的な反応パターンを変えるための手がかりに対する感受性
生理	嫌悪に対する感受性	
	右扁桃体の大きな活性化	葛藤と関連する前部帯状皮質の大きな活性化
ニューロイメージング	右扁桃体および他の右前部構造における灰白質量の増加	前部帯状皮質の灰白質の増加

出典：Mendez, M. F. (2017). A neurology of the conservative-liberal dimension of political ideology. *The Journal of neuropsychiatry and clinical neurosciences*, 29(2), 86-94. p.87

【研究 1】困窮者の人数が増加するにつれて寄付額が減少する「思いやりの減衰」は明確に認められなかった（平均寄付額；1名条件 698 円・2名条件 673 円）。同情高群は低群よりも寄付額が高く、否定的感情高群は低群よりも寄付額が高かった。さらに、否定的感情高群において、罪からの注意の切り替え低群よりも高群の寄付額が低かった。罪からの注意の切り替え低群において、否定的感情低群よりも高群の寄付額が高かった。罪からの注意の切り替え高群では、否定的感情による寄付額の差は認められなかった（Figure 1）。困窮者に向けられる注意を制御する力の個人差と、対象への感情が、彼らへの向社会的行動を左右することが示された。特に、ネガティブな感情制御の重要性が示唆された。

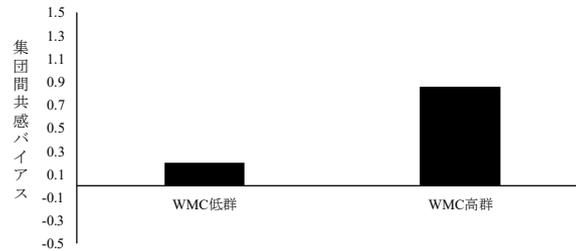
Figure 1
否定的感情と罰からの注意の切り切り替え（EC）の個人差が寄付金額に及ぼす影響



【研究 2】外集団よりも内集団に対する援助政策を支援する傾向が認められ、集団間共感バイアスが確認された。共感マインドセットの影響は確認されなかったが、WMC の影響が認められ、WMC 低群よりも高群において集団間共感バイアスが顕著であった。一方、内集団と外集団に対

する共感にはバイアスは認められなかった。自動的に生じる情動的共感よりも、限りある資源の分配を考慮する必要がある政策支持において、WMCの影響が確認された。内集団 / 外集団成員に対する状況に応じた向社会的行動の選択が、WMCの個人差と関与している可能性が示唆された。

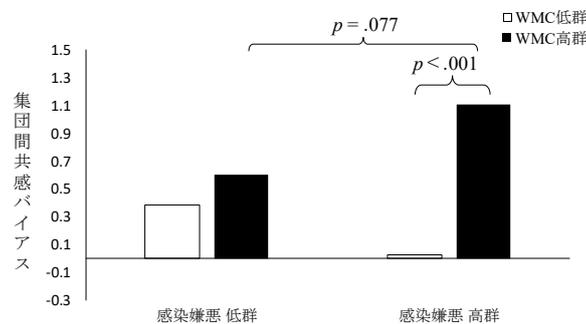
Figure 1
WMCが援助政策に対する支持における集団間共感バイアスに及ぼす影響



注) 高得点ほど外集団より内集団への援助政策を支持していることを示す

【研究 3】外集団よりも内集団に対する援助政策を支援する集団間共感バイアスが確認された。この傾向は、感染嫌悪が高く、外集団を避ける目標が活性化している WMC 高群において顕著に認められた (Figure 1)。外集団を避けるという目標が活性化した場合には、WMC 高群は低群よりも援助を必要とする外集団に対して否定的行動を取る可能性が示唆された。注意制御力の高さが、外集団の排斥に結び付く条件が明らかとなった。

Figure 1
WMCと感染嫌悪が「援助政策に対する支援」に関する集団間共感バイアスに及ぼす影響



【研究 4】外国人が増えるという脅威情報に接すると、日本人参加者のうち、注意制御力が低いものは、高い者よりも外国人に対する不安、怒り、恐怖を感じていた。情動伝染（自動的過程による情動的共感）を行う者は、不安が高かった。注意制御力が高く、情動伝染が低い者は恐怖を感じにくかった。注意制御力が高く視点取得（統制的過程による認知的共感）を行う者ほど怒り、恐怖が低いことが示された。外集団脅威情報に接した際、注意制御力に支えられた認知的共感の高さと、情動的共感の低さが外集団に対する否定的感情の生起を抑制している可能性が示唆された。

以上より、分断を乗り越えるには、共感がどのような条件の下で促進的あるいは抑制的に機能するのかを明らかにする必要があることが示された。特に、分断を乗り越えるためには、共感に伴う否定的感情の制御を左右する認知資源 (WMC) の個人差と、当該文脈において活性化される目標を考慮することの重要性が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉田 綾乃	4. 巻 23
2. 論文標題 政治的イデオロギーの個人差と極性化に関する研究動向	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 感性福祉研究所年報	6. 最初と最後の頁 53-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 吉田綾乃
2. 発表標題 共感マインドセットとワーキングメモリキャパシティが集団間共感バイアスの生起に及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第64回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉田綾乃
2. 発表標題 大学生は保守化したのか？投票行動とモラルファンデーションに注目した検討
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第32回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ayano Yoshida
2. 発表標題 The influence of individual differences in effortful control on compassion fade
3. 学会等名 17th European Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田綾乃
2. 発表標題 実行注意の個人差が思いやりの減衰に及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ayano Yoshida
2. 発表標題 Exploring the Mechanisms of Intergroup Empathy Bias: Effects of Pathogen Threat and Working Memory Capacity
3. 学会等名 33rd International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 吉田綾乃
2. 発表標題 認知的感情的共感と注意制御の個人差が外集団脅威情報接触後の集団間感情に及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第64回大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------